

## 「青い鳥なんていらぬ」

武田綾乃

青い鳥。メーテルリンクの書いた名作童話。私の家にも綺麗に装丁された青い鳥の絵本がある。幸せは身近なところにあるよ、と幼い頃に大人に言われた。でも、本当にそうだろうか。手を伸ばさずとも掴める幸福になんて、私はちっとも興味がない。

「清水さんって私らとはなんか違うね」

中学生の時、クラスメイトにそう言われたことがある。そりゃそうでしょう、と私は笑った。折り目正しくルールを守る彼女たちを、私はどこか下に見ている。制服のスカートをきちんと伸ばして、ボタンは一番上まで留めて。そんなことで頭が良くなるならいくらでもそうするけど、でも、実際はそうじゃない。私はあの子達のようにはなりたくない。幸せの青い鳥は確かに家の鳥かごにいるかもしれない。だけど、そんなところに収まった幸せなんて、私は要らない。

「本当に？」

鏡の中の私が尋ねる。制服を着た私が、私を真っすぐに見つめている。洗面台の上には、洗浄液で満たされたコンタクトケースが置かれていた。朝の支度は煩わしいが、化粧抜きで学校に行くなんて私には耐えられない。

「本当になって、何が」

「幸せが要らないなんて嘘っぱちじゃん。長い物に巻かれる才能がないってだけでしょ」

「そんな才能、最初から要らないし」

「でも、考えなきゃ幸せになれるよ。教室にいるあの子達みたいに」

「お前はあんな風になりたいの。違うでしょ」

「そう？ 案外、似合うかもよ。優等生も」

「うるせー」

私は唇を尖らせる。とんだ茶番だ。鏡に映った自分との対話。くだらない自問自答。

想像の中の私は真面目な身なりをして、賢そうな顔で生きている。毎日学校に行って、同年代の男の子を好きになって。SNS 映えする写真を撮って、小さな幸せを親しい

友人と共有している。

「クソくらえ」

鏡に向かって、私は舌を突き出す。そういうありふれたものから逃げたくて、私はここまで来たんじゃないか。勝手に牙を抜かれて飼い慣らされるくらいなら、手に余ると捨てられる方がよっぽどいい。

ハンガーに掛かるコートへ手を伸ばす。制服の上から羽織ったアイボリーのコートは、校則で禁止されていた。以前、教師に注意されたことがあったが、きっと今日は怒られないだろう。なんせ登校する最後の日だから。

「高校中退おめでとう」

誰も祝ってくれないから、私だけが祝ってあげる。皮肉っぽく吊り上がった唇が、次第に笑みの形を作る。幸福とは程遠い自分の姿は、惚れ惚れするくらい美しかった。